
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 丸《まる》の内《うち》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「均 - 土へん」、第3水準1-14-75]

一

僕はコンクリートの建物の並んだ丸《まる》の内《うち》の裏通りを歩いてみた。すると何か [# 「均 - 土へん」、第3水準1-14-75] 《にほひ》を感じた。何か、？ ではない。野菜サラダの [# 「均 - 土へん」、第3水準1-14-75] である。僕はあたりを見まはした。が、アスファルトの往来には五味箱《ごみばこ》一つ見えなかった。それは又如何にも春の夜らしかった。

二

U 「君は夜《よる》は怖くはないかね？」
僕 「格別怖いと思つたことはない。」
U 「僕は怖いんだよ。何だか大きい消しゴムでも噛んでゐるやうな気がするからね。」
これも、このUの言葉もやはり如何にも春の夜らしかった。

三

僕は支那の少女が一人《ひとり》、電車に乗るのを眺めてみた。それは季節を破壊する電燈の光の下だつたにもせよ、實際春の夜《よ》に違ひなかつた。少女は僕に後ろを向け、電車のステップに足をかけようとした。僕は巻煙草を銜《くは》へたまま、ふとこの少女の耳の根に垢《あか》の残つてゐるのを発見した。その又垢は垢と云ふよりも「よごれ」と云ふのに近いものだつた。僕は電車の走つて行つた後《のち》もこの耳の根に残つた垢に何か暖さを感じてゐた。

四

或春の夜《よ》、僕は路ばたに立ち止つた馬車の側を通りかかつた。馬はほつそりした白馬《しろうま》だつた。僕はそこを通りながら、ちよつとこの馬の頸すぢに手を触れて見たい誘惑を感じた。

五

これも或春の夜のことである。僕は往来《わうらい》を歩きながら、鮫《さめ》の卵を食ひたいと思ひ出した。

六

春の夜の空想。 いくつかカツエ・プランタンの窓は広い牧場《ぼくぢやう》に開いてゐる。その又牧場のまん中には丸焼きにした [# 「奚 + 佳」、第3水準1-93-66] が一羽、首を垂れて何か考へてゐる。.....

七

春の夜の言葉。 「やすちやんが青いうんこ [# 「うんこ」に傍点] をしました。」

八

或三月の夜《よ》、僕はペンを休めた時、ふとニツケルの懐中時計の進んでゐるのを発見した。隣室の掛け時計は十時を打つてゐる。が、懐中時計は十時半になつてゐる。僕は懐中時計を置き火燵《ごたつ》の上に置き、丁寧《ていねい》に針を十時へ戻した。それから又ペンを動かして出した。時間と云ふものはかう云ふ時ほど、存外《ぞんぐわい》急に過ぎることはない。掛け時計は今度は十一時を打つた。僕はペンを持つたまま、懐中時計へ目をやると、今度は不思議にも十二時になつてゐた。懐中時計は暖まると、針を早くまはすのかしら？

九

誰か椅子の上に爪を磨いてゐる。誰か窓の前にレエスをかがつてゐる。誰かやけに花をむしつてゐる。誰かそつと鸚鵡《あうむ》を絞め殺してゐる。誰か小さいレストランの裏の煙突の下に眠つてゐる。誰か帆前船《ほまへせん》の帆をあげてゐる。誰か柔い白パンに木炭画の線を拭つてゐる。誰か瓦斯《ガス》の [# 「均 - 土へん」、第3水準1-14-75] 《にほひ》の中にシヤベルの泥をすくひ上げてゐる。誰か、
ではない。まるまると肥つた紳士が一人《ひとり》、「詩韻含英《しゐんがんえい》」を捻げながら、未《いま》だに春宵《しゅうせう》の詩を考へてゐる。..... [# 地から1字上げ] (昭和二・二・五)

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

底本の「アスファルトの往来」は、「アスファルトの往来」にあらためました。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月27日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。